

人に優しく、自分に厳しく ものづくりの楽しさを学ぶ

上野工業高校・上野農業高校・上野商業高校を再編し、県内初の総合専門高校として2009年に開校した伊賀白鳳高等学校。約120人の生徒が学ぶ建築デザイン科では、実習や地域活動を通じて、ものづくりの楽しさを学んでいる。

**基礎を学び応用力を習得
生徒の希望に耳を傾けて**

2019年4月に工芸デザイン科から改称された建築デザイン科は、「建築・インテリアコース」と「デザインコース」から成る。「建築・インテリアコース」では、上野工業高校インテリア科時代のカリキュラムを継承し、木工加工の知識や技術を学ぶほか、図面の製作や測量などの実習を通して建築やインテリアへの学びも深める。人の暮らしを豊かにする住環境づくりを学ぶのは、「デザインコース」。デッサンなどデザインにおける基礎を身につけ、絵画、版画、彫刻などの技術を高める。

伊賀白鳳高校では、学科を区分せず生徒募集する「くり募集」制度を設ける。生徒は1年次1学期に全てを体験した後、2学期以降に希望する学科・コースを選択できる。伊賀白鳳高校建築デザイン科の中山啓介先生は、「入学当初は進路が明確



info
伊賀白鳳高等学校
伊賀市緑ヶ丘西町2270-1
☎0595-21-2110



介護施設や保育園などからの依頼で家具を製作するほか、小学校での出前授業を実施するなど、年間を通じて地域交流が活発な「建築・インテリアコース」。一年の集大成となるのが、毎年3月に開催される「展示即売会」である。当日はイスやテーブルなどの家具をはじめ、陶器など100点を超える作品が会場にずらり。質の良さが好評で、開催を待ちわびるリピーターも多い。中には以前購入した家具の修理を依頼する愛

製作活動を通じて 人への配慮を学ぶ

な生徒は少ないので、積極的にコミュニケーションをとって生徒一人ひとりの希望に耳を傾けている。多分野での応用ができるよう基礎を幅広く学び、ものづくりの楽しさを知ってもらいたい」と話す。

製作過程では大型の機械も使用。展示即売会に向けて、チームでチェストを手がけているのは、建築・インテリアコースの前川桃香さん(2年)。「大工の仕事をしている父の影響で建築に興味を持ち、設計などを学んでみたい」と、専攻の理由を明かす。製作過程では準備が十分でなく、やり直しも経験。失敗を機に仲間とのコミュニケーションが増え、絆が深まったとほほ笑む。

工芸部に所属する森かおるさん(2年)は、昨年の「みえ高文祭」美術・工芸部門に出品したオブジェが全国高等学校総合文化祭への推薦作品として選ばれた。「部活動で身につけた技術が授業で生かされたときに自身の成長を感じる」と森さん。ものづくりへの理解を深め、将来は製造業への道に進みたいと先を見据える。

一瞬の気のゆるみが大事故を引き起こす可能性もあり、高い集中力を要する。図面を二カ所でも間違えれば製品は完成しない。その他にも背丈や取っ手の太さなどユーザーへの細やかな配慮が求められる。「機能性や安全性などを踏まえたものづくりを通して、人のことを考えられる人間になってほしい」と、中山先生は、学科のモットーである「人に優しいものづくり」の所以を明かす。「家の設計者には住む人の生活をイメージする想像力が不可欠。既存の建物の図面をトレースする授業では、間取りの意味などをしっかり考えてほしいですね」と、建築分野を担当する花井俊和先生は、未来のものづくり職人たちにあたたかなまなざしを送る。

家の設計者には住む人の生活をイメージする想像力が不可欠



1.2.あらゆる製作工程において、高い集中力が求められるものづくり。納期までに終わらせるよう、計画性を持って製作を進めるスキルも重要だ。3.毎年3月に地域の商業施設を会場に開かれる「展示即売会」では、生徒たちが接客も経験。来場者とコミュニケーションしながら商品を販売する



左から、建築・インテリアコースの前川桃香さん、森かおるさん、建築デザイン科の中山啓介先生、花井俊和先生